

# 東邦大学学術リポジトリ

Toho University Academic Repository

タイトル	教育課程におけるシティズンシップ教育の多様性：自由学園男子部の実践に着目して
別タイトル	The Diversity of Citizenship Education in Curriculum : Focusing on the Practice of JIYU GAKUEN Boy's Department
作成者（著者）	相田, まり / 李, 舜志
公開者	東邦大学教員養成課程
発行日	2020.12.28
ISSN	24358290
掲載情報	東邦大学教職教育研究. 3. p.1 10.
資料種別	紀要論文
内容記述	研究論文
著者版フラグ	publisher
メタデータのURL	<a href="https://mylibrary.toho u.ac.jp/webopac/TD11399456">https://mylibrary.toho u.ac.jp/webopac/TD11399456</a>

## 教育課程におけるシティズンシップ教育の多様性

—自由学園男子部の実践に着目して—

The Diversity of Citizenship Education in Curriculum:  
Focusing on the Practice of JIYU GAKUEN Boy's Department相田 まり<sup>1</sup>・李 舜志<sup>2</sup>

Mari AIDA, Sunji LEE

## はじめに

本稿の目的は、創立期の自由学園におけるシティズンシップ教育を検討することによって、シティズンシップ教育のカリキュラム化の多様な方向性を示すことである。本題に入る前に、まずはシティズンシップ教育とそのカリキュラム化についての先行研究を簡単に整理しておきたい。

近年、選挙権年齢を引き下げる法改正がなされたこともあり、シティズンシップ教育が注目を集めている。シティズンシップ（市民性）とは、「民主主義社会の構成員として自立した判断を行い、政治や社会の公的な意思決定に能動的に参加する資質をさす概念である。近年、日本を含む各国で、そういう資質を育むシティズンシップ教育を、学校教育の中心的な課題にしようという動きが強まっている」<sup>1</sup>。シティズンシップ教育とは、民主主義社会における市民を育てる教育なのである。

ただしそれは「既存の国家や社会にとって都合のいい『品行方正な良き市民』をめざすものにとどまるのではなく、政治的リテラシーを備えた『能動的な市民』を教育することが目指されている」<sup>2</sup>。したがってシティズンシップ教育は、政治制度についての暗記

や、投票の予行演習などを行うだけでなく、社会や世界が抱える問題について、異なる意見を持つ他者と共に思考し議論する市民の育成を課題とするのである。

また、以上の課題を遂行するにあたって、従来の学習指導要領の転換を小玉は訴えている。

今までの学習指導要領は、たとえば日本学術会議の中に教科内容を考える部会があり、あるいは教科内容の関連学会が存在し、それらが中心となってカリキュラムの編成の仕組みを、もう少し社会との関係を意識したものに転換できないかということである。（中略）社会に生きるとは、もちろん実際に社会に出たときに役立つという意味もあるが、それ以上にもっと深い意味もある。学校は、子どもたちが社会を生きていく上でふと立ち止まって思考をする際に、深い視点を提供し得るような題材を提供することができるのではないかと考えられる。<sup>3</sup>

したがって、以上から、シティズンシップ教育を理論と実践の往復において考察するためには、カリキュラム化の在り方もまた議論

1 東京大学大学院教養学研究所 博士課程

2 日本学術振興会特別研究員PD/2019年度 東邦大学教員養成課程 非常勤講師

の組上に載せなければならない。「シティズンシップ教育のカリキュラム化には二つの方向性がありうる」と言われる<sup>4</sup>。「一つは、既存の教科を横断するという方向性である。各教科に市民的な資質の養成につながるものが含まれているので、それをクロスさせていくような方法である」<sup>5</sup>。たとえば小玉らが訪問した対象校の一つである神奈川県立湘南台高校では、総合学習を一つのプラットフォーム的な時間にして、そこを中心に各教科のネットワーク化を試みている。

そしてもう一つは、「より積極的にシティズンシップ教育をカリキュラムの領域化、教科化していくという方向性である。お茶の水女子大学附属小学校は『市民』という教科(学習領域)を設け、これを軸にシティズンシップ教育を行っている」<sup>6</sup>。このように、シティズンシップ教育のために新たな領域や教科を設けることによって、民主主義社会の構成員として必要な知識や資質などを身に付けることができるのである。このような試みを理論的かつ実践的に考察することは、選挙権の年齢が引き下げられたにもかかわらず、依然として政治に対する若者の関心が低いままにとどまる日本社会において、喫緊の課題だと言えるだろう。

本稿は、以上を背景に、いわゆる「大正自由教育」の潮流の只中ですでに積極的にシティズンシップ教育を試みていた自由学園の事例を検討する。というのも、自由学園をはじめとする大正自由教育の実践の多くは、小玉が述べたような「学校は、子どもたちが社会を生きていく上でふと立ち止まって思考をする際に、深い視点を提供し得るような題材を提供することができるのではないか」という問いへの応答を試みているからである。そしてこの問いへ応答するにあたって、自由学園は「よきシティズン」の教育を試みていた。このように自由学園の市民教育から、現代におけるシティズンシップ教育が学ぶべきこと

を別決すること、それが本稿の課題となる。

## 大正時代の教育課程

本題に入る前に、明治から大正時代の教育課程について概観しておきたい。「第一次世界大戦後の世界においては、戦争の惨禍と抑圧から解放され、平和と自由とヒューマニズムが強調されることとなった。わが国のように、直接的には戦争の惨禍に巻き込まれることなく、むしろ貿易により巨利を博した国においても、明治以来の国家主義を反省し、批判するような個人主義的、自由主義的ムードが社会全般にみなぎり、教育界も影響を受けて『第一次新教育運動』といわれる自由主義的教育が一世を風靡したのである」<sup>7</sup>。

第一次新教育運動は大正自由教育あるいは大正新教育と呼ばれ、明治以来の硬直した公教育を批判し、欧米の新教育をモデルに新たな教育理論および実践の構築を目指した。その特徴として、「自学主義、個性主義、作業主義」などが挙げられ、「これらの主義を、少数定員の学級、学校をもって文部省的形式主義に拘泥することなく実践に移したのが大正期に入って続出した新学校である」<sup>8</sup>。そして都市を中心に設置された私立の学校として、成蹊学園や成城小学校、明星学園や玉川学園らと並んで、羽仁もと子の自由学園が挙げられる<sup>9</sup>。

自由学園は1921(大正10)年、元ジャーナリストで雑誌『婦人之友』の創刊者である羽仁もと子(1873-1957)とその夫・吉一(1880-1955)によって創立された。羽仁らは画一的な詰め込み教育に反対し、子どもの心や頭の働きを尊重することを教育の根本要件とした。その一方で、大正新教育の実践がしばしば子どもの内面や欲望の解放という意味での自由(いわゆる子ども中心主義)を称揚していたのに対し、羽仁らの自由学園は、信仰に裏付けられた「真の自由人」の教育を掲げたところにその特徴がある。

しかし、このように自由や個性が教育現場において強調されたとしても、「1917（大正6）年の臨時教育会議においては、小学校教育課程での国史教育の重視、高等小学校での教科目の選択幅の拡大、国民教育、修身教育の重視などが示され、1919（大正8）年の小学校令施行規則の改正をみるのである」<sup>10</sup>。それではこのような自由と規律の強化が奇妙に共存する時代において、自由学園の市民教育はどのように行われていたのだろうか。

自由学園の市民教育を検討するにあたって本稿が着目するのが、自由学園男子部の実践である。自由学園男子部は、もともとの自由学園の趣旨である生活教育（生活そのものとしての教育）を実現するという目的に加えて、「よきリーダー」をつくるという目的の下に始まった。満州事変と国際連盟の脱退を経て、日本が国際的に孤立し軍国主義への道を突き進んでいく中で、男子のための学校をつくることは、一般的な理解でいえば、国家の命令に従うよき兵士を育てることを意味していた。

しかし、自由学園の目指すリーダーとは、それとは異なるものだった。自由学園の目指すリーダーとは、自分の頭で考え、多様性の中で他者と助け合い、学び合いながらよりよい社会を形成していく、よき市民を意味していた。ここには、国家の権威を絶対のものとしそれに盲目的に従うのとは別の、みずからの判断で社会を切り拓いていくリーダー像があった。

このように、自由学園男子部の教育は「よきリーダー」としての市民の育成を目指していたのであり、この教育方針は、現代のシティズンシップ教育が目標とする「既存の国家や社会にとって都合のいい『品行方正な良き市民』をめざすものにとどまるのではなく、政治的リテラシーを備えた『能動的な市民』を教育すること」<sup>11</sup>と重なるところが多い。したがって、自由学園男子部の教育を検

討することによって、現代におけるシティズンシップ教育を歴史的・思想的に相対化し、そのカリキュラム化の多様な在り方を考察することができるのである。

（李舜志）

## 1. 自由学園男子部設立の背景と目的

本章では、自由学園の教育理念について述べた後、男子部設立の背景と目的を明らかにする。

### 1-1. 自由学園の教育理念

はじめに述べたように、自由学園の特徴は、単なる欲望の解放ではない、信仰に裏付けられた「真の自由人」の教育を目指すところにあった。羽仁らのいう「真の自由人」とは、「神の造りたまひしままに、神の力と人の力で生活しつつ育ちつつある」<sup>12</sup>人、言い換えれば、与えられた能力や環境の中で、他者とかわり合いながら、みずからの意志で学び成長する人のことである。

もと子と吉一は、旧来の型にはまった生活をしている人々に対し、合理的で近代的な生活をするよう啓発する一方で、自由主義を単なる解放、自己中心主義と捉える人々に対して、それは自由の履き違えであると批判した。教育に対しても、知識を覚えるだけの詰め込み教育は子どもの心や頭の働きを抑えてしまうが、単に子どもの欲望を解放すればよいというものでもないとした。そして、子どもがみずからの欲望を取捨選択し、正しい道を選び取れる人になるために、「宗教心」の教育が不可欠であると主張した。「宗教心」とは、「我々の上に働いている」「人間以上の意志や感情」を感じ、探究しようとする心のことと説明される<sup>13</sup>。つまり、真理に照らして物事の善悪を判断しつつ、みずからの意志で、他者とともによいことを実践していくことのできる人間を育てようとしたのであった<sup>14</sup>。

## 1-2. 男子部設立の経緯

自由学園は女学校としてスタートした後、1927年に男女共学の初等部を設置していた。この初等部から初めて男子が卒業する1935年に、男子部が創設された。

男子部は普通科4年（現在の中等科に相当する）、高等科3年の合わせて7年制で、女子部と同様、各種学校であった。そのため正式な卒業資格が得られず、一般的な進学や就職に不利だけでなく、徴兵猶予もなかった。満州事変後の日中戦争へと向かっていく情勢下で、このことは大きな意味を持っていたと想像される。しかし、それでも文部省の規定に囚われず自分たちの理想とする教育を自由に実践していくことに、羽仁らは大きな期待と希望を持っていた。

羽仁らにとって、男子部は単なる初等部の卒業生の受け入れ先として設置されるものではなかった。男子部創設に当たって、もと子は次のように述べている。

我々の女の学校の経験も、これから男の学校を与えられて、ほんとうに完成の道に立ち、本当の男の学校は、本当の女の学校のある所にはじめて存在し得るものだという証にもなりたいと希っています。男女とも、同じ人間教育の精髓の中で、共にその人間性を伸ばし、かつその基礎の上に立ってのみ、両性の特殊性がまたほんとうに発揮され[る]べき筈のものです。<sup>15</sup>

ここに書かれているように、羽仁らにとって、女子教育は男子教育があってこそ（同様に、男子教育は女子教育があってこそ）生かされるものであり、その意味で男子部の創設は自由学園という学校の完成に一步近づくことを意味していた。

## 1-3. 男子部の目指す人間像

では、男女とも同じ人間性の基礎を築いた

上に行われる、男子の特性を生かす教育は、何を指すのか。吉一は「学園男子部の教育目標の重要な一つとして、Leadershipということを考えて」<sup>16</sup>いるとし、次のように述べている。

新しい社会は新しい指導者を要求している。[...] 願わくは、この南澤の天地が、資格だの肩書だのでなく、その実質において、たしかに明日の社会の指導的役割を果たすにたるところの、叡知と熱情と意志をもった、頼もしい若者たちを、次々にはぐくみ育ててくれるように。<sup>17</sup>

ここには、「資格」や「肩書」ではなく、「その実質において」社会を導いて行くことのできる「新しい社会」に相応しいリーダーを育てたいという願いが端的に書かれている。

ここで言うリーダーとは、しかし、組織の上に立って部下に指示を出すような、一般的にイメージされるリーダーとは異なっている。男子部の目指すリーダーについて、もと子は『婦人之友』の座談会の中で、以下のよう述べている。

男子部の教育が目指す「リーダー」とは、「これまでの世の中に存在した、働かないで奔走したり大言したりしているリーダー」ではない。また、「理科が出来るとか、文学が得意だとかいう」特定の分野に優れた人のことでもない（その意味で、「いわゆる天才教育」とは異なる）。男子部の教育が目指すのは、他人に指示して自分では動かない者でも、自分の専門以外のことには暗く他分野の人と協力できない孤立した天才でもなく、「協力をなし得る天才」をつくることである。<sup>18</sup>

さらに、上に示したリーダー像について、吉一は次のように付け加えている。

一般の教育としては、リーダーシップよりもシティズンシップを育てることに重

きをおくべきでしょうが、然し現在としては、まずリーダーをつくる必要がありますでしょう。<sup>19</sup>

よきシティズンであると同時に、よきリーダーであり得ることは、不可能でなく、むしろ不可分だと思われまます。<sup>20</sup>

ここでは「シティズンシップ」の内実は明らかにはされていないが、いまからおよそ100年前に「シティズンシップ」教育が明示されていたことは注目に値する。新しい時代を切り拓いていくためには、まずリーダーが必要だが、本来はすべての人が「よきシティズン」となるべく教育を受けられる社会となることが望まれる。「よきリーダー」は、「よきシティズン」であることを前提とする。つまり、男子部の教育は、「よきシティズン」であり、かつ「よきリーダー」である人を育てることを目指していたのであった。

以上、自由学園の理念と男子部設立の経緯、および目指す人間像を明らかにした。男子部が目指すのは、自身の特性を生かしつつ他者と協力することのできる社会のリーダーを育てることであった。では、そうした人間を育てるために、具体的にはどのような教育が行われたのだろうか。次章では、男子部のカリキュラムの具体的な内容について検討する。

## 2. 男子部のカリキュラムと実践内容

前章の内容を受けて、本章では、男子部のカリキュラムについて検討する。はじめに全体的な内容を確認し、続いて男子部の特徴的なカリキュラムである①工作、②農業について、具体的な授業の内容等について述べる。

### 2-1. 男子部のカリキュラム

前節で述べたように、自由学園男子部は、

「よきシティズン」であると同時に「よきリーダー」であるような人を育てることを目指していた。では、そのカリキュラムはどのように構成されていたのだろうか。

男子部のカリキュラムについて、もと子は男子部の教育方針についてまとめた論文の中で、次のように述べている。

七年勉強の前半は、国語数学英語に集中させて、さまざまな方法で、あの男の子の逞しい勢力を利用して、十二分に効果的の勉強をさせます。そうして午後の生活に、他の学科の基礎となるべき知識と興味を、主としてさまざまな勤労によって学ばせて行きたいと思えます。<sup>21</sup>

ここではまず、7年間の前半の4年間（普通科）では、午前は「国語」「数学」「英語」の勉強を集中的に行い、午後は「他の学科の基礎となるべき知識と興味を、主としてさまざまな勤労によって」学ぶというカリキュラムが示されている。必要な学科の勉強を集中的に行う一方で、学んだことを生活に生かす試みとして「勤労」が重視されている点が注目される。

ここで挙げられている「勤労」とは、単に農作業や土木作業等に奉仕することではない。もと子はこれについて、次のように述べている。

勤労のための勤労は、子供を倦きさせるものですが、そのいろいろの工夫から出て来る理科的工作、その美術心から出て来る芸術的工作、実際の必要から来る生活的工作、それらを指導して子供の手と頭からこういうものが出来たかと思われるようなものを、段々つくり出すようになれば、誰でも意識せず自然に勤労を愛する所の謙遜な気持の人になります。<sup>22</sup>

ここでは、男子部の「勤労」が「勤労のため

の勤労」ではなく、子どもの「工夫」や「美術心」や「実際の必要」から生じる「理科的」、「芸術的」、「生活的」な「工作」であることが説明されている。言い換えれば、子ども自身の知識や興味関心、生活における実的な必要に基づく点が重視されている。また、子どもがみずから考え手を動かすことによって、「自然に勤労を愛する所の謙遜な気持の人」になることが目指されている。みずから働くことを厭わない人間は、進んで仕事を見つけ、気持ちよく働くことができると同時に、仕事を通じて自分の無力さを知り、驕り高ぶることがなくなる。こうした考えが、「勤労」を重視するカリキュラムに反映されている。

次に、後半3年間（高等科）のカリキュラムは、以下のように書かれている。

七年勉強の後半は、その前半において獲得した所の、国語英語数学の力と、その工作的勤労的努力の生活から得た興味と経験を利用して、盛んに研究することと、目を持って身を持ってそれぞれの実地にふれること、理科でも地理でも歴史でも、政治経済文学でも、観ること考えること実行することを通して、その大切な基礎を学びます。そうしてまたこの時期において、彼等はめいめい自分の中にある力の種類を段々に発見し、自覚して行くでしょう。<sup>23</sup>

ここには、普通科で身に付けたことをさらに発展させていくカリキュラムとして、「研究すること」、「実地にふれること」、「観ること考えること実行すること」が挙げられている。ここでも「基礎」と書かれているのは、高等科を卒業したら勉強が終わるのではなく、それがさらに大学やその先での研究に繋がっていくと考えられていたからである<sup>24</sup>。普通科で学んだことを発展させつつ、自分は

何を得意とするか、何を研究したいかという自分の特性や興味を発見する道筋としても想定されていたのである。

## 2-2. 工作と農業

続いて、具体的な授業内容を見てみよう。ここでは男子部に特徴的な実践として、①工作、②農業を取り上げる。

### ①工作

男子部の特徴的なカリキュラムとして第一に挙げられるのは、工作である。開学以来男子部では、「科学及び技術についての教育」<sup>25</sup>として週に1日「工作」の時間が設けられた<sup>26</sup>。初年度は自転車の分解と組立を行っているが<sup>27</sup>、扱う題材は徐々に増え、全学年が揃った1941年には、測距儀やラジオの設計・製作等を含む7学年分の教程案が確立された<sup>28</sup>。また、1940年からは、新入生が自分たちの使う机と椅子を手づくりするようになり、「雲水机」と名付けられ男子部の伝統となった<sup>29</sup>。

上記のほかにも、学園内の小川の流れを利用した水力発電所や水族館、実験工場がつけられ、それらの中から、日常における様々な問題を数的に分析・解決するための「生活数学」が生み出された<sup>30</sup>。さらに、天文学、考古学、野鳥観察など、各研究グループが結成され、そのうち化学グループでは、台所の汚水から洗濯石鹼をつくったり、精米所の糠から化粧石鹼をつくるなど、生活と密着した研究が行われ、数々の成果を挙げていった<sup>31</sup>。

### ②農業

第二に挙げられるのは、農業である。男子部では、創設3年目頃から「産業」が勃興し始め、豚・鶏などの畜産、水産、農芸などが行われていた<sup>32</sup>。これらは、「採算的にどうでもよい所謂学校園であってはならない」という方針の下、家畜の世話から採算の計算まで生徒たちによって本格的に取り組まれ、教

育と産業が一体となった「産業即教育」が行われた<sup>33</sup>。

また、1942年には那須に農場が建設された(那須農場)。これは吉一がかねてから望んでいたもので、第1回卒業生らの手によって、高原で治水も整備されていない土地が開墾され、30人が泊まれる山小屋が建てられた。男子部の学生は3年生の秋にここで麦蒔きをし、翌年6月頃、3週間ほど泊まり込みで、その麦の収穫をはじめとする農業生活を送る<sup>34</sup>。

那須農場では「労働と研究と静思」の勉強が行われた。生徒たちは、晴れたら目一杯身体を動かし汗を流して農作業をし、雨が降ったら平常通りの勉強をする。農作業は、専門家の指導の下、科学的知識に基づいて行われる。晴耕雨読の生活の中で、机上の学習と実生活とが結び付いていく。そして夜には皆で炉辺を囲んで静かに聖書を読み、祈ることを学ぶ<sup>35</sup>。こうした生活の中で生徒たちは、謙虚に内省しつつ、逞しく世界を切り拓いていくことを学んでいった。

ここまで、男子部のカリキュラムと実践内容を明らかにしてきた。男子部では、学科の勉強を集中して行いつつ、学んだ知識を実生活に生かすべく「勤労」の時間が重視されていた。具体的には、産業と連携した工作と農業が実践されていた。しかし、なぜ「よきシティズン」であると同時に「よきリーダー」である人間を育てるために、工作や農業が重視されていたのだろうか。この点について、節を改めて考察する。

### 2-3. 工作と農業の意義

学校教育の中での工作や農業というと、いわゆる職業教育がイメージされる。しかし、前節での検討からわかるように、自由学園の工作や農業は、単なる職業教育にとどまらない。工作の意義について、吉一は次のように述べている。

科学及び技術の教育においても、詰込と模倣を排して、独創と発明を重んずる気風を養うことの必要はいうまでもない。次には、一切のごまかしを斥けて、良心的な仕事をする心がまえを培うことである。[...] 学園男子部では開学以来、一週一日『工作』の日というのがあって、『物』に即して物理化学の大局を把握させることに努めて来たが、これは同時に『物』に即して鋭敏なる良心を養う手だてでもあった。<sup>36</sup>

ここでは、「工作」の目的として「『物』に即して物理化学の大局を把握させる」ことと「『物』に即して鋭敏なる良心を養う」ことが挙げられている。科学や数学や技術を総合する勉強としてこの「工作」の時間は設けられていたが<sup>37</sup>、そうした学問的な意義だけでなく、ものづくりにおける態度も重視されていたのである。

先の引用に続けて、吉一は「鋭い良心は優れた技術を産む」、「技術教育の急所は、技術良心の砥練しれんをおいてほかにはない」とも語っている<sup>38</sup>。技術を磨こうとすれば、思い通りにならないことや自分の能力の限界が見えてくる。一切のごまかしもせず真摯に向き合おうとするところから、優れた技術が生まれる。こうした意味で、「技術の最も深い処には祈りがある」<sup>39</sup>。つまり、吉一は、ひたむきに物と向き合い技術を磨いていく中で、自分の能力の限界を受け入れる謙遜な態度と、その限界を乗り越えようとする熱意を育てようとしていたのである。

また、農業についても「自然の要求は、人間のつくった時間割には当てはまらない」<sup>40</sup>と述べており、自然の力を前にした人間の無力さを痛感することが重視されていたことがわかる。吉一が「土に親しみ、自然を相手の作業は」実物に触れるという意味以上の「深い教育的意義をもつ」<sup>41</sup>と述べているのは、



晴耕雨読の生活の中で、与えられた環境に柔軟に適応していく生き方を体得させようとしたからだろう。

工作や農業においては、思い通りにものをつくれなかったり、予定通りに作業が進まなかったりする。教科書の知識を学んだだけでは、優れた技術は手に入らないし、人間の力で自然をコントロールすることはできない。しかし同時に、思いがけずよいものが出てきたり、美しい光景に出会えたりすることもある。それは人と人との関係においても同様である。皆で一つのものをつくり上げる過程では、互いの欠点や苦手な部分も見えてくるが、それまで知らなかった特技や美点を発見することもある。うまくいかないからといって途中で投げ出したり、相手を責めたりするのではなく、自分の思い通りにならないことを受け入れ、長所も短所も認めた上で、互いを生かしながら協力する。そうすることによって、社会が拓かれていく。こうした意味で、「物をつくるは心をつくるにはほかならない」<sup>42</sup>であり、農場の仕事は「土を拓き心を拓き世界を拓く」<sup>43</sup>ものである。このことを学ぶために、自由学園男子部では、工作と農業という経験が必要と考えられたのであった。

(相田まり)

## おわりに

以上、本稿では、創立期の自由学園における「よきシティズン」への教育を検討し、そこからシティズンシップ教育のカリキュラム化の在り方についての示唆を得ようと試みた。

自由学園の特徴は、単なる欲望の解放ではない、信仰に裏付けられた「真の自由人」の教育を目指すところにあること、すなわち、与えられた能力や環境の中で、他者とかわり合いながら、みずからの意志で学び成長する人のことだと確認された。その中でも本稿

が取り上げた男子部では、自身の特性を生かしつつ他者と協力することのできる社会のリーダー、すなわち「よきシティズン」を育てることが目指された。この意味で、自由学園男子部は「シティズンシップ教育」を先駆的に実践していたのである。

この「シティズンシップ教育」はカリキュラムとして「勤労」を、より具体的には工作と農業を採用していた。これらは単なる職業教育ではなく、「工作」とは「『物』に即して物理化学の大局を把握させる」ことと「『物』に即して鋭敏なる良心を養う」機会として、また農場の仕事は「土を拓き心を拓き世界を拓く」ものとして捉えられていた。両者共に、自己の限界と向き合うこと、また物や共に作業する他者と向き合うことが必要とされるのであり、その点で自身の特性を生かしつつ他者と協力することのできる人物、すなわち「よきシティズン」へと成長する機会として採用されたのであった。

以上のカリキュラムが興味深い点として、それがシティズンシップ教育とは一見して無関係、時には対立すると目される労働あるいは仕事を積極的に取り入れている点である。たとえば本稿冒頭で取り上げた小玉が参照するハンナ・アレントは、古代ギリシャの「人間の条件」の観点から、労働 (labor) や仕事 (work) を、個々人の単独性が現れる活動 (action) から切り離した。アレントの議論と自由学園の実践を拙速に結びつけることは慎まなければならないが、いずれにせよ、シティズンシップ教育の一環として工作や農業を重視する自由学園の実践は、労作教育や芸術教育が持つシティズンシップ教育への示唆を与えてくれるものだと言えるだろう。

なお、本稿では自由学園の中でも男子部の特徴的な実践として工作と農業を取り上げたが、自由学園は学園全体が「真の自由人」を育てることを目的としている。したがって、

女子部や初等部などの実践も含めて包括的に検討することで、シティズンシップ教育のカリキュラム化へのさらなる示唆が得られるだろう。この点については今後の課題としたい。

(李舜志)

- 1 小玉ほか2013、4頁。
- 2 同上書、5頁。
- 3 小玉ほか2014、1頁。
- 4 同上書、7頁。
- 5 同上。
- 6 同上。
- 7 森山ほか2013、24頁。
- 8 同上。
- 9 同上。
- 10 同上書、25頁。
- 11 小玉ほか2014、5頁。
- 12 羽仁もと子「教育の目的」『婦人之友』41巻10号、1947年、1頁。
- 13 「活きた修身」『羽仁もと子著作集』第11巻、初出は1927年、312頁。
- 14 この背景には、羽仁らのキリスト教思想がある。詳細については相田2017を参照されたい。
- 15 羽仁もと子「われらのグループに与えられんとする教育の新分野 自由学園の男子部新設について」『婦人之友』28巻8号、1934年、34頁。
- 16 羽仁吉一「雑司ヶ谷短信 Leadership」『婦人之友』29巻3号、1935年、288頁。
- 17 同上。
- 18 「座談会 男子のための新しい学校」『婦人之友』28巻7号、1934年、40-41頁。
- 19 同上論文、40頁。
- 20 同上。
- 21 前掲「われらのグループに与えられんとする教育の新分野 自由学園の男子部新設について」、35頁。
- 22 同上。
- 23 同上論文、36頁。
- 24 自由学園では当時すでに、女子部の卒業生が中心となって消費組合、農村セツルメント、工芸研究所など

の活動が行われていた。これらは「生活大学」と称され、後の最高学部（大学に相当する）設置へと繋がっていく（詳細は村上2015を参照）。

- 25 羽仁吉一「雑司ヶ谷短信 士魂工才」『婦人之友』35巻5号、1941年、146頁。
- 26 森下（2011）に授業の詳細が一部紹介されている。
- 27 『学園新聞』75号（1935.5.1）
- 28 『学園新聞』133号（1941.4.29）
- 29 羽仁吉一「雑司ヶ谷短信 雲水机」『婦人之友』34巻8号、1940年、208頁。
- 30 『学園新聞』142号（1942.3.15）
- 31 羽仁吉一「雑司ヶ谷短信 伸びてゆく」『婦人之友』30巻6号、1936年、288頁。
- 32 『学園新聞』130号（1940.12.31）
- 33 『学園新聞』120号（1939.12.25）
- 34 『学園新聞』26号（1953.6.20）
- 35 羽仁吉一「雑司ヶ谷短信 男子部の夢」『婦人之友』29巻9号、1935年、288頁。
- 36 前掲「雑司ヶ谷短信 士魂工才」、146頁。
- 37 『学園新聞』133号（1941.4.29）
- 38 前掲「雑司ヶ谷短信 士魂工才」、146頁。
- 39 「思想しつつ生活しつつ祈りつつ」という自由学園（女子部）の標語（男子部は「思想・技術・信仰」）にも示されている通り、羽仁らは教育の根底には祈りがあると考えていた。彼らのいう祈りとは、教育という困難で不確定な道を突き進む際に、どうしても人知を超えた大きな力（端的にいえば神）の助けを信じざるを得ない、そんな心を指していると思われる（羽仁もと子・吉一の祈りについての詳細な検討は今後の課題としたい）。
- 40 羽仁吉一「雑司ヶ谷短信 晴耕雨読」『婦人之友』35巻3号、1941年、158頁。
- 41 同上。
- 42 羽仁吉一「雑司ヶ谷短信 物心一如」『婦人之友』36巻10号、1942年、108頁。
- 43 羽仁吉一「雑司ヶ谷短信 心を拓く」『婦人之友』35巻12号、1941年、118頁。

#### 【参考文献】

引用に際しては、旧字体を新字体に、旧仮名遣いを現代仮名遣いに改めた。

#### ◆自由学園関連の文献

- 『家庭之友』(1903.4-1908.12)、内外出版協会。  
『婦人之友』(1908- )、婦人之友社。  
羽仁もと子 (1983-2011)『新版 羽仁もと子  
著作集』全21巻、婦人之友社。  
羽仁吉一・羽仁もと子 (1991)『自由人をつく  
る——南沢講話集——』、自由学園出版局。  
羽仁吉一 (1956)『雑司ヶ谷短信』上下巻、婦  
人之友社。  
—— (1985)『我が愛する生活』、自由学園出  
版局。  
『自由学人 羽仁吉一』編集委員会 (2006)『自  
由学人 羽仁吉一』、自由学園出版局。  
羽仁恵子 (1972)『自由学園の教育』、自由学  
園出版局。  
『学園新聞』(自由学園資料室所蔵)

#### ◆その他の文献

- 相田まり (2017)「羽仁もと子の教育思想にお  
ける『自由』——『宗教心』との関係に  
着目して——」『東京大学大学院教育学研  
究科基礎教育学研究室研究室紀要』第43  
号、119-130頁。

- 石原秀志 (1977)「近代日本における教育農場  
の展開 (Ⅱ) 自由学園の場合—羽仁もと  
子, 吉一の教育思想とその実践」『茨城  
大学教育学部紀要』26巻、137-149頁。  
小玉重夫 (2003)『シティズンシップの教育思  
想』、白澤社。  
小玉重夫ほか (2014)『シティズンシップ教育  
のカリキュラム開発 (科学研究費補助金  
(基盤研究A)研究成果報告書;2011~2013  
年度・社会に生きる学力形成をめざした  
カリキュラム・イノベーションの理論  
的・実践的研究:シティズンシップ教育  
グループ研究成果報告書)』、東京大学大  
学院教育学研究科小玉研究室。  
村上 民 (2015)「『生活大学』構想とその展  
開」『生活大学研究』1巻1号、8-25頁。  
森下一期 (2011)「昭和10年代, 科学技術教育  
を目指した自由学園男子部の「工作」」  
『技術・職業教育学研究室研究報告:技  
術教育学の探求』8巻、1-24頁。  
森山賢一ほか (2013)『教育課程編成論』、学  
文社。